

# 高貴なる魔女 クラウゼア

淫墮の異端審問

立ち読み版

大熊狸喜  
挿絵／しゅんぞう

18  
未 満

二次元ドリームノベルズ

プロローグ	暗黒の魔女クラウゼア	006
第一章	黒い影	013
第二章	悪魔審問	059
第三章	悪魔審問 二日目	111
第四章	カライルーズ王国に涙はいらぬ	163
第五章	馬上の裁き	218
エピローグ	あの国へ	243

## 登場人物紹介

Characters



おおとり

### クラウゼア・鳳・ オリハルゲルド

カイルーズ王国の森にひっそりと住む魔女。  
町の人々との交流はほとんどないが、国を守る  
魔女として畏敬の念を抱かれている。

### グルーク・キヒョルド・ リム・カイルーズ

カイルーズ王国の現統治者。クラウゼア  
に執着し卑猥な目を向けている。

### ガギロギア

王子に付き従っているカイルーズ  
王国の宰相。ギラギラとした鋭い目  
が印象的。

「なんでも、この国に住む魔女が悪魔と通じて、オレたちの命を悪魔に捧げるつもりらしいぜ……！」

「その魔女って、あの……」

特に夜の酒場は、男たちの不満が吐き出される場でもある。

口々に噂を流す者たちと、その噂に乗る男たち。

しかし町の人々の殆どは、そんなウワサ話を信じてなどいなかった。

「馬鹿馬鹿しい。クラウゼア様は先日だって、ドラケニアと戦ったウチのダンナを、助けてくれたんだよ」

「不作だって、あのバカ王子の放蕩癖への神罰じゃないのか？」

現王ではなく王子と名指す事で、王への批判をうまく回避している国民たちだ。

魔女批判どころか、王政批判になりかねない事態に、噂を流した張本人のグルークが慌てふためく。

「ガギロギアっ！ 国民どもは僕の悪口ばかり言ってるではないか！ このまま暴動にでも発展してしまったら、僕の生活はどうなるんだっ！ あああ、恐ろしい……っ！」

頭を抱えて玉座で震える王。

対して宰相は、ギラついた眼球を更にギラつかせて、笑って答える。

「グルーク王よ、これで良いのです。国民たちの、クラウゼアに対するこの信頼。これこ

そがあの魔女めを王の前に跪かせる、最上の一手に御座います」

「ほ、本当か？ 何かあったらお前の責任だぞ。僕は無関係だからな？」

「御意……ククク……」

情けない言葉に何の恥も感じない王に、宰相は深く頭を垂れた。

その頃、夜の城下町で不審な事件が起こり始めた。

「ウーイ……つたく、もつと賃金寄越せってんだア……ヒック」

今宵も、安い葡萄酒で憂さを晴らした男たちが、路上で転げたり座り込んだりしている。

そして人もまばらな裏路地で、今夜も事件が起こった。

「ふええ……やべえな。早く帰んねーと、カーチャンがウルセーや」

「ウチもだ、へへへっ」

しこたま飲んだ男たちが、暗い路地をフラフラと家路に向かう。太った中年の愚痴に、痩せた中年がヘラヘラと同意していた。

そんな二人の前に、漆黒の影が静かに音も無く舞い降りる。全身を闇色のマントに包み、頭には三角の鍔広な帽子を乗せている。

その姿は、魔女。

「んん……なんだあ？」

「どした、おい……んん？」

酔った二人の前で、女がフワッとマントを開く。

隠されていた女体に、男たちは酔った目を釘付けにされた。

白い肌が月光を浴びて、誘うように艶めく。

マスクで隠された素顔は解らないものの、真っ赤な唇が鮮血のように、ヌラリと微笑んでいた。

抱くと折れそうな細い肢体に、豊かなバスト。

引き締まったウエストから豊かに広がる女腰が、牡の性欲求を誘って煽る。

ムッチリとした白い腿と、細い足首。

起伏に恵まれた女体は、黒皮のビキニだけで護られている。

押し込められた双乳が、ビキニを食い込ませてムニッと丸く盛り上がる。

ハイレグショーツは腰紐が極細で、更に背後は丸いヒップが完全に露出していた。

両の手足は付け根付近まで黒く艶めく革装飾で、全身は微細な宝飾類で、きらびやかに飾られている。

ウェーブのかかった黒髪が、優しい夜風に揺れて官能的な芳香を漂わせていた。

「ウフフフ……」

女が微笑むと、酔った男たちは光に引き寄せられる羽虫のように、マスクの美貌と胸の

深い谷間に吸い寄せられる。

「およよ。オネーチャン、もしかしてお客探してんの？ ヒック」

痩せた男はどうやら、魔女の恰好をしたコールガールだと思っただけらしい。

「ふええ……いい身体だねえ。うっへへへ」

ニヤける男たちを引き寄せた魔女は、子供っぽく微笑むと、桃の花を取り出し、二人の顔に向かってその甘い香りを優しく吹きつけた。

「クスクス……フウウ……」

マスク美女の挑発吐息を、男たちは我先にと鼻腔に吸い込む。

「はふはふ……ふええ……」

「くんくんくんっ……およよっ！」

魔法の桃の香りを嗅がされた二人は、中からズボンを突き破りそうな勢いで股間が隆起。更に意識も強く興奮して、一刻も早く女を抱きたい暴走寸前の状態になっていた。

「ふええっ！ こんなガチガチ、久しぶりだっ！」

「おオレもだあつ、早く帰ってカーチャン抱くかつ！」

「クスクス」

家族を大切にする中年男たちの前で、うら若きマスクの美女がビキニのカップを更にグッと寄せて、谷間の柔らかさを見せ付ける。

「ふええっ！」

「こ、こんなプニプニっ、久しぶりに見たぞっ！」

桃の香りと谷間の効果で、男たちの目が真っ赤に輝く。

まるで、女の唇のようなヌラッとした血の色。

「オジサン、イイヨ…クスクス」

それは、牝の欲求を知らない無垢な少女が清楚なその身を委ねるような、抗いがたい誘惑。

血の色の唇から発せられた誘いの文句に、血の色の瞳の男たちは、急速に理性を奪われてゆく。

「ふっ、ふええええっ！」

「お、オネーチャアアアンっ！」

月明かりから隠れる路地裏で、ビキニの魔女が男たちに襲い掛かれた。

太った中年に正面から抱き付かれて、脂ぎった顔を谷間に埋められてフガフガと嗅がれる。

背後に抱き付く痩せた男は、マントを捲って細い背中を嗅ぎまわりながら、紐ショーツでは絶対に隠れない巨尻を撫で回して、柔らかさと暖かさを堪能。

「ウフフフ…オジサンタチ、カワイイ♥」

中年男たちに挟まれながら、マスクの美女はまるで母のように優しい笑顔で、禿げかかった頭を優しく撫でた。

太った男がビキニのカップを引き下げて、豊かなバストを露出させる。

白くて丸くて柔らかくて温かい乳肌が溢れてると、夜風に晒された先端の桃色媚突が、キュ…と硬化して朱みを増す。

「ふええええっ、おっぱいいいっ！　なんて白くて大きいんだあっ！」

タプンと弾む柔らかか双乳を食い入るように見つめると、両掌で掴んで揉み上げて、ツンと硬化する乳首にムシャブリつく。

「アアン…オジサン、エッチィ…♥」

長年連れ添った奥さんで経験値は十分だからか、男の吸い付きと舌使いは、美女の官能をゾクゾクと甘く刺激しているらしい。

ヒップを撫でる瘦せた男も、濡れた舌で細い背筋を舐め上げながら、紐だけで隠された尻谷間を優しく指愛撫する。

「レロっ、レロロちゅっ——オネーチャン、なんてスベスベっ——ちゅぷっ——してるんだあっ！」

滑らかな背中を舌舐めしながら、指先は紐の下の尻谷間を進軍。一際高い熱源にたどり着くと、そこはプクンと膨れた後孔だ。

「尻も温かくてっ、イヤらしいなあっ！」

「オジサン：アアンツ——ナデナデ、イヤン♥」

言葉で抗いながら、甘い肢体を揺する美女。

男たちの股間が更に熱を帯びてくると、美女は自ら跪いて身を沈めて、二人の股間を見上げる。

「ウフフ：オジサン、スゴイネ…♥」

突き上げられるズボンの紐を、黒皮手袋に包まれた細い指がスルッと解く。

下着までずり下げられると、いつもとは比較にならない程の硬化を示す黒い勃起が、力強く起立していた。

「ふえええっ！ こんな感覚っ！」

「おおよよよっ！ 若え頃以来だあっ！」

二十歳の頃の勃起を示す逸物に、男たちは本能的な歓喜と、より強い興奮に包まれてゆく。

「ウフン：スゴイカオリ…♥」

性臭まで若返った男性器を、跪くマスクの美女は頬を染めて、まるで尊敬の眼差しで嬉しそうに見上げていた。

早くなんとかしてくれと突き出されたペニスそれぞれに、美女の掌が添えられる。

触れるか触れないかの優しいタッチに、男の腰が奥までジリつと痺れた。

「んんんっ——オ、オネーチャンっ！」

「は、早くっ——しごいてくれえっ！」

「ウフフフ…ハ…イ♥」

優しく妖艶な笑みを見せると、手袋手淫が始められる。

——シユ、シユ、シユ…シユシユシユ、シユルシユルシユルシユルシユル…。

美女の手淫は絶妙だ。

数回の愛撫と男の反応で、男性器の性弱点を見極めて、それぞれの性感帯を連続刺激。勃起をしごかれる中年たちは、娘ほど年下の美女に、完全に主導権を握られている。

「おおおおおおっ——こ、腰がつ——爆発しそうだっ！」

極薄い革手袋で愛撫をされて、勃起本体が強く甘く、痺れてゆく。

温かく滑らかな革でペニスを愛撫されると、湿りとは違うヌメリの張り付き感で、ジワつと痺れる。

ペニスの肌から中心に向かって焦らされて、本体の芯から腰の奥へと、射精への力が強く貯められてゆく。

「はあっ、はああっ——オネーチャンっ、上手すぎだああっ！」

愛撫され続ける勃起は熱を上げて、更にグンッと硬さを増す。

腰の奥が、強い圧迫感で膨張する感覚に満たされて、もう射精をしないと収まらないと、自分でも解る。

無意識に美女の黒髪に手を添えて、肉に突き込みたいと、肉の欲求を伝えていた。

男たちの身体がグッと力み、放出の欲求で強く瞼を閉じる。

「ふええっ——オネーチャン…っ！」

母に縋る子供のように忍耐する、中年二人。

そんな姿に、美女はご褒美を捧げた。

「ウフフフ…ダシテ、イイヨ…ペロリ♥」

限界まで硬くなった勃起の裏側、亀頭部分の根元が、濡れた舌でツンと舐め上げられる。素早い急所への舌刺激で、男たちは同時に、腰の力を爆発させられた。

「ふええええっ！」

「およよよっ！」

——どどビゅうううううううううっ！

二人の勃起からマスク美女に向かって、熱い白濁が一斉に放出される。

水鉄砲のような勢いの精液が、魔女の黒髪やマスク、細い鼻筋や真っ赤な唇を溢れて穢す。

「アアン…クサクテ、ステキィ…♥」

名前すら知らない中年二人の汚濁をマスクの顔面に浴びながら、美女はウツトリと官能の笑みを浮かべている。

前髪から頬に垂れる精液が、細い顎から豊かな剥き出し乳房へと、ヌツトリと垂れ伸びる。

欲求を吐き出した男たちは、かつて無い程の満足感と放出感で満たされていた。

「ふえええ……こんなの、初めてだあ」

「オレもだあ……おおよよっ？」

「クスクス……」

タツプリと放出したにもかかわらず、美女が無垢に微笑むと、勃起は再びガッチガチに硬化した。

「みっ、見る見ろっ！ オレのこの姿っ！」

「おお俺だっつっ！ おオネーチャンンっ！」

再び強い肉欲に支配された男たちが、黒皮ビキニの美女の女体に手を伸ばす。

一度射精をしたからか、今度は手淫では済まない勢いだ。

「ウフフフ：ワタシノカラダ：イイヨ♥」

男の欲求を美女が受け入れると、中年たちはだらしない笑顔で歓喜する。

「じゃ、じゃあまずは俺からなっ！」

太った男がのし掛かろうとすると、美女は優しく制止して仰向けに転がした。

天上を指す肉棒を艶の視線で見つめると、美女は自ら男に跨がって、紐ビキニのショーツをずらす。

「ふえええつ、なんてエロいマンコだっ！」

美女の肉溝は、まるで淫欲なバラのように朱く、美しく艶めいて咲き誇っていた。

女を知らない男子だったら、見ただけで理性を失って強姦に走ってしまいそうな程、朱く色付いて蜜の艶を魅せている。

経験豊富な中年男性だったら、一目でその柔らかさと締め付けを確信できるだろう。

男の視線を受けながら、マスクの美女がゆつくりと、大きなヒップを下ろしてくる。

ツンと先端が触れたら、処女の柔らかい感触と濡れた蜜が、勃起の奥までジンと痺れを走らせた。

「ウフフフ……アアン♥」

——づぷっ！

一気に奥まで迎えられると、髪々の濡れた膣壁が強く抱き締めてくる。

「ふえええええええつ——なんてっ、熱くてキツくて柔らかいんだあつ！」

全体でヌルつと締め付けて、細かい髪で肌の急所を責め立てる濡れ膣壁。

太った男の性感を羨む瘦せた男は、朱い唇で、焦らされる勃起を喉奥にまで含まれた。

「んんん……んちゅ、んくん…♥」

「およよよっ——オネーチャンの口っ——なんて、吸い付きいいっ！」

シットリと艶めく唇で、ペニスの根元をキュッと締められる。熱い口腔内では、タツプリの唾液でヌルヌルに濡らされていた。

強い吸引で、腰の奥が暴発させられそうな、強い焦燥感。

肌全体はサラサラの熱い舌で満遍なく舐められて包まれて、カリ部分の裏側などの弱点を舐め攻められた。

「おっ、オネーチャンっ！」

「は、早くっ——動いてくれえっ！」

二人の男性は、もう早く射精がしたくて、全身が力んで硬化する。

「ウフフ……カワイイ、オジサン…♥」

漆黒の美女が巨尻の上下を開始すると同時に、唇愛撫の抽送も開始。

——ぢゅぷづぷちゅ、づぷちゅるちゅぷづぷっ、ちゅッぺろツちゅっんぷんくんぷっ！

壁の腔壁が勃起を締め付け、熱い口内が男性器を舐め転がす。

上下の媚口は肉の角を根元まで含み、全てを吐き出させようと、性弱点の箇所を集中愛撫。

「く、口もっ——強く吸われてっ——凄く気持ちいいっ！」

「マンコ最高だあつ——もつともつと動いて、出させてくれえつ！」

魔女の肉の虜となつた中年たちが、射精欲求に押し潰されて、哀願をする。

男たちを受け入れる美女の女体は、上下動に合わせて肢体がくねる。

仰向け男の突き上げるままに巨尻がバウンドし、丸い艶肌に恥汗が滑る。

細い背中がクンッと反れて、男の力を優しく逃がす。

黒髪の頭を掴まれて前後させられながらも、吸引の力は全く弱まらない。

瘦せた男のするがままの口淫なのに、濡れた舌はあくまで抽送に合わせて、勃起の弱点

を舐め愛撫し続けていた。

豊かな双乳は、男たちの突き込みのまに上下して、柔らかさと大きさを見せ付けている。

先端の媚突も更に朱みと硬化を増して、男たちの欲求を視覚からも増幅させてゆく。

下から突き上げる太った男が、射精までの限界を口にする。

「はあつ、はああつ——早くつ——はああつ——出したいいいいっ——はああつ！」

その目はしかし、虚ろ。

「おオレもつ——はああつ、はああつ——呑んでつ——くれへつ——はああつ、はああつ——っ！」

唇奉仕を受ける瘦せた男も、息の切れ方が異様な限界を迎えている。



「な、何を……ハっ！」

何をされるのか、香りで解った。

少年たちが手にしているボウルには、白くて粘性のある液体「聖なる母乳」が湛えられている。

聖なる母乳とは、テリィボル神の祝福を受けた乳牛の乳から作られた、ヨーグルトだ。

本来なら祝い事にも使われるけれど、悪魔払いの場に於いては、聖水よりも悪魔を苦しめる効果があるという。

ボウルの白い液体は、一見するとヨーグルトに見える。しかし液体からは、クラウゼアが昨夜教えられた牡の性臭と、女性の愛液が混ざった和合液の匂いがしているのだ。

「こ、これは……っ！」

粘液からは魔法の力まで感じられて、この精液も自分が吞まされたポーシヨンと同じ力で生かされている、と推察される。

「なぜ、このような物を——ハっ！」

疑問を感じて、すぐに推察できてしまった。

昨日の審問でクラウゼアの肉体は、グルーク王子の掌で淫液を塗られ、精液を性感として受け入れる肢体にされてしまっている。

この精液を、身体に塗られてしまったら——。

魔女の想像が、現実の物とされてゆく。

「魔女クラウゼアよ、これからお前の身体に聖なる母乳を塗り、その身を悪魔から清めましょう。お前が本当に悪魔と通じていなければ、母乳は真水となんら変わりはありません。もし悪魔と通じているのなら、火のように熱い責め苦と感じる事だろう」

司祭の言葉に、強い焦燥で混乱する。

こんな精液を肌塗られてしまったら、肉体が強い性感に灼かれてしまい、肌と神経と子宮が異常なほどに、過敏にされてしまおうだろう。

しかも、昨日の破瓜によって一時的とはいえ魔力を消失してしまってる今、媚薬の力で性感を高められている肉体に精液を浴びせられてしまったら。

精液から性感を拾い上げ、精液から魔力を得てしまう、淫堕魔女に――。

性快楽に溺れ、やがて魔法も忘れ自我も失い、男性たちの肉遊具へと自ら堕ちてゆく、淫堕魔女。

そんな破滅へと、また一歩近づけられてしまう事は、確実だ。

「や、やめてください！ 私は本当に、悪魔と通じてなどつ――」  
「始めなさい」

クラウゼアの言葉を遮るように、司祭が少年たちに命令を下す。  
知らない男たちの精液が塗られてしまう――。

「い、いやです…っ！」

逃れられない危機感で焦燥をして、魔女の鼓動がトクトクと高鳴ってしまう。

恥ずかしそうに興奮を隠せない少年たちは、聖なる母乳と信じるボウルの液体を片手で掬い取ると、クラウゼアの肢体にトロリと塗り始めた。

一人の手が、ビキニに持ち上げられた爆乳を柔らかくなぞる。丸い乳肌の全面が、見知らぬ少年の掌と牡たちの精液で、触れられた。

——ぬりぬ。

粘液が垂らされた途端、乳房全体が強い性熱に包まれて、滑らかな肌がピリリつと性感灼きにされてしまう。

「んうっ——このようになっ、無駄なっ…事をっ！」

（たっ、耐えなければ…っ！）

思わぬ艶声に少年は焦ったものの、すぐに司祭に命じられて、更なる肌愛撫を再開。

——ぬちゅり、とりりゅ…さわさわ…サわりスリり、タぶるモみユリユる…。

年頃のせいかな、緊張感と同時に恥ずかしさがあったのだろう。

最初こそ遠慮がちな触り方だったけど、一旦女性の肌に触れたら、堰を切ったように大胆に、愛撫を始めた。

「ムネっ、いやですっ——おなか、そんなに撫でなひいっ！」

小さなビキニで先端部分だけが隠された露出乳房を、上から横から撫でられ揉み上げられて、柔らかい脂肪に指を食い込まれる。

少年の指の間から精液がこぼれ、糸を引きながら乳房に揉み込まれて、白い肌に塗り込まれて浸透させられてゆく。

繊細な肌が性粘液をタツプリと受けて、淫液の力で強い性感として、認識させられてしまう。

精液による性感に燃える肌の熱で、粘液から牡の腐臭が立ち上る。

「くっ臭ひっ——おっ、おやめへ——ヤメてへっ——はあっ、あああっ！」

（に、匂いが……臭いの、身体が……っ！）

精液の匂いを嗅がされるとそれだけで、子宮が飢餓感を湧き起こされてしまう。

「こほっ——こんなっ、においひっ！」

（ダメ……ちからが、抜けて……っ！）

淫堕魔女への入り口が開くように、女体が精液による性感で灼かれてゆく。

しかも今のクラウゼアは、忍者イヌワシの忍術で気を乱されている。

肉体が精液から魔力をどれほど得ても、その途端に体外へと発散、無力化させられてしまうのだ。

別の少年の少し硬い掌で、胸よりも子宮に近い箇所、引き締まった細い腹部を前後左右

に撫で回されて、震える過敏な肌に精液を塗り込められてゆく。

肢体の各所を年下少年たちの掌で好き勝手にされている。その危機感と羞恥感で全身が上気をして、肌が痺れて、より敏感にされてしまってもいた。

「くふっ、あふっ——よこは、ダメですふっ——っ！」

脇腹をヌル々と精液で撫で上げられたら、心臓がトクンッと跳ねて、子宮の飢餓感が強く刺激をされてしまう。

魅惑的な女体に触れ続ける少年たちも、次第に興奮の吐息がハッキリとしてきた。

「ああ：はあ、はあっ、はああ：っ！」

「こ、これが、女性の肌。こ、こんなに：っ！」

年齢的に最も女性に興味を抱く年頃なのに、戒律によって日常的に、禁欲生活に従事しているからだろうか。

液体を塗られた女体から立ち上る、牡精液の匂いは、全く気にならない様子だ。

むしろ、性を意識して始めて触れたであろう女肌の柔らかさや暖かさ、触れた女体の性的反応に、完全に捕らわれてしまっている。

もちろん、愛撫なんてした事も無いから、自分の欲求のままに、強く乱暴な肌愛撫だ。

しかし触れられるクラウゼアも、優しい愛撫なんてほぼ未経験。先日だって、グルーク王子の好きなように弄ばれたただけだ。

少年たちの素直で■い欲求を向けられると、怖くて嫌悪感を否めないのに、無意識の母性本能が、どこか受け入れつつあるのも事実だった。

精液まみれに濡れてヌルヌルの掌で、乳房を揉み上げられて、指を深く食い込まれる。「お願い、ですふっ——もふっ、やめ……っ！」

揉み遊ばれる爆乳から、強くて小さな甘電がピリリつと流されて、心臓から脳神経と子宮までが、甘く強く貫かれる。

過敏な背筋を指先で撫で上げられると、上体から手足の先にまで痺れが伝搬されてしまつて、肢体がしなつて、より煽情的に女体を魅せた。

年下少年たちに愛撫責めをされる、極小黒皮ビキニの拘束魔女に、民衆の興奮も高まつてゆく。

「なんか……すげえエロいぞ……っ！」

「ガキに聖乳塗られて、あんな悶えてやがる……！」

「やっぱり悪魔と通じて……くそうっ！」

罵りながらも、悪魔信者だという確信と、自分もあの肌を味わつてみたいという素直な劣情を、隠さない男性たち。

見上げている女性たちも。

「よくあんなに……恥ずかしくないのかしら？」

「人前で、ねえ…！」

女を隠さないクラウゼアの姿に嫌悪感を示しながらも、その快感を計って想像している様子だ。

（た、耐えなくては。でなければ、悪魔信者だと思われて…っ！）

「みなさんがっ、見ていますううっ——どうか、やめてへええええっ！」

爆乳を下から持ち上げられて、ビキニの裏地と乳首が擦れ合わされると、豊かな脂肪全体を熱灼きにされてしまう。

引き締まった臍の下を指撫でされると、本能的な危機感でお尻を引いてしまい、突き出したTバックのヒップをツルんと撫で上げられてしまった。

爆乳もヒップも逃げ場など無く、ただ人前で、年下の少年たちの掌で揉み遊ばれて、濃い精液を塗り込められてゆく。

白濁を塗られた肌の全てが、粘液から強い性感を拾う淫らな神経へと、塗り替えられてゆくのが止められない。

「はあああっ——っあはあああっ——そんなにひいいいっ——触れなはあああああああ  
ああっ！」

吐息は完全に湿ってしまい、拒絶の言葉も官能の色香を隠せない。

愛撫を続ける少年たちも、修行の身分を示す純白な貫頭衣の股間付近が、中から硬く押

し上げられていた。

壇上に座するグルーク王子も、愛撫責めに身悶える魔女の恥態に、興奮とイヤらしいニヤニヤ顔を隠さない。

肌撫で責めに身悶えるクラウゼアに、ギー司祭が静かに問うた。

「クラウゼアよ。悪魔との繋がりを断つと約束するか？」

もはや質問でもなく、悪魔信者を改心させる行為そのものだ。

「わはうっ——わたくしわはああっ——あくまとのつながりひっ——なんてへっ——ムネっ、いやですううっ！」

断定に対する拒絶の言葉さえ、肌愛撫の強い官能でトロけさせられてしまう。

聖乳による清めだと信じきっている人々には、魔女の姿は悪魔との姦交で淫らに堕ちた悪魔信者の身悶えにしか、見えないだろう。

しかも、人々の方向から壇上に向かって風が吹いているから、偽聖乳の匂いがバレル事も無い。

それら全てを計算しているギー司祭は、冷静な狂気の眼差しで納得をすると、少年たちに更なる聖乳の清めを命じる。

「まだ神の御心が届かないようです。致し方ありません、悪魔との繋がりが最も深い場所である局部にまで、聖乳の清めを行いましょう」

「きよっ——っ！」

少年たちの、高濃度な精液に濡れる掌で、局部を愛撫される。

人前でそんな事をされるなんて、恥ずかしすぎて絶対にイヤだ。

「いいっ、嫌ですふうううっ——っあはあああああああっ！」

拒絶したと同時に、興奮を隠せない少年の手が、拘束された魔女のビキニ内側へと潜り込んできた。

極小なトップ生地内部に潜り込まれると、すぐに小さな乳首を探り当てられて、指で摘まれて転がされる。

「痛い痛いっ——はあああっ——ちっ、くびひっ——こ、ころがさっ——なひでへえええっ！」

異性を知らない少年の指で乱暴に弄ばれると痛みが走るのに、その奥には更に強くて小さな、性感の痺れが感じられる。

少年の愛撫に邪魔だと判断されたのか、手でビキニがずらされ、魔女の右乳首がポロリと溢れ出た。

「見ろ、乳首だぞ！」

濃い桃色に上気した小さな乳輪は、興奮を示して細かく粒立っている。

更に小さな乳首もその身を固くして、少年たちによる愛撫で性感を得ていると、広場の

人々に証明してしまっていた。

「硬くしてやがるぜ！ 淫乱魔女め！」

少年の掌で乳房全体を揉み上げられて、硬化した媚突を摘まれて転がされて、ツンと引かれる。

乳首にまで精液を塗り込められて、揉み遊ばれて穢されて、より過敏な性神経へと染められてゆく。

「あうっ——見ないっ——っはあああっ——お願いですふうっ——もふ、ムネっ——やめてへえっ！」

陽が傾き、東の空に星が煌めき始めると、壇上は松明の明かりで煌々と照らされていた。濡れた肌や大きなヒップ、豊かな乳房や小さな乳首が、松明の炎に照らされて艶めく。乳首転がして性感灼きにされるクラウゼアは、更に大胆な箇所への愛撫で、羞恥の官能に強く肢体を跳ねさせられる。

腹部を遊んでいた少年の濡れた手が、ビキニボトムの前方内側へ、ヌルゆりと入り込んできたのだ。

「っひいいあああっ——っ！」

下腹部に触れたと思ったなら、更に下へと滑り込まれる。

ビキニのフチに入られた次の瞬間には、ツルツルの恥丘を通られて、無毛の割れ目を直

撫でされた。

大切な場所に、見ず知らずの男たちの精液が、ヌリユヌリユと塗り込められてゆく。

少年に秘処に触れられた瞬間、心臓がドキッと跳ねて、強烈な恥ずかしさがこみ上げてくる。

「いやですふっ——あああ——そんな場所はおおうううあああああああ——」

柔肉の閉じ目に触れると、縦割れから下腹部全体へと、ジワリと温かい痺れが広がる。

濡れた指で数回撫でられると、更に粘膜の中にまで侵入をされてゆく。

「だめへええっ——中に指ひいっ——離ひてくださひいひいっ！」

もはや遠慮がちななんて全く無く、少年の欲求の赴くままに、力強く粘膜を前後摩擦されてしまう。

閉じ目の柔らかさを楽しめると、更に肉芽や尿口、一際熱い膣孔までが、指遊びで弄ばれてゆく。

粘膜を撫でられると、子宮全体がより強い飢餓感を湧き上がられて、灼かれてしまう。器用にも包皮を剥かれて、濡れた小さな肉芽を摘まれて転がされると、下腹部の全てが性感灼きにされて、全身の力が抜かれてゆく。

尿口を弄ばれてツンと押されると、不意に放尿感を刺激されたように、膀胱が震える。



熱い膣孔は既に蜜を湛えていて、遊ぶ少年の指に對し、性感をくれる愛しい恋人を迎えるように、吸い付いた。

少年の指と秘処との僅かな隙間には、蜜と精液の混ざった和合の糸が、トロリと伸びる。女体に触れる少年たちが、強い興奮を口にした。

「おっぱいの先って、コリコリしてる！」

「な、なんか、ここも熱いよ……っ！」

爆乳を揉み上げられて媚突を転がされて、肉芽を指押しされながら膣孔を指貫通される。「っああああああああっ——そこわはああああっ——やめてへえっ、くだけはっ——くらさひいいいいいっ！」

乳首からの鋭い甘電によって、心臓から背筋を通って、脳裏と子宮が連続姦通。

クリトリスと膣孔への指愛撫で、子宮から背筋を通って脳裏や手足の先にまで、脱力をさせられる程のトロける性感を、一方的に伝搬されてしまう。

拘束されるクラウゼアの肌が、強い飢餓感で震えて脱力をさせられて、性官能で上気してゆく。

艶めく肌が恥汗を浮かせて、吐息は乱れて臉が重たい。

「はああっ、はああっ——っあはああああんっ——ひいいっ！」

乱れた息も、不意に肉芽や乳首を転がされると、強い性感でヒクつと詰まる。

胎内の飢餓感で全身の隅々まで灼かれてしまうと、昨日の夜中ずっとグルーク王子に教えられ続けた男性の存在感を、女体が求めてしまっていた。

強い性感と飢餓感に追い詰められる魔女に、ギー司祭が再び問う。

「クラウゼアよ。悪魔との決別を宣言するか？」

ウンと頷いてしまったら、楽になれるだろう。

しかし謂われの無い罪を認めるなんて、魔女としても、母と前王の名誉の為に、絶対にできない。

「わはっ、わたくしはっ——はああっ——あくまとっ——つながってっ、などおおっ！」  
生真面目な魔女の予想通りな対応に、ガギロギアは密かに、邪眼を喜びで歪める。

「ギヒヒヒ、それでこそクラウゼア殿だ……」

「致し方ありません」

審問を司るギー司祭は、漆黒の魔女に対して更なる責め苦を告げた。

少年たちの指愛撫が終えられながら、極小のビキニを上下とも奪われる。

「ひいっ——っ！」

クラウゼアは壇上で、黒い帽子と手袋とブーツだけを纏った半裸姿にされてしまった。

更に手首の拘束が直されると、腰ほどの高さの台座へと、X字のまま仰向けで、全身を再拘束。

壇下を固めるヤン騎士団長が、大柄な部下たちに命令を下した。

「神教に従い、壇上へ！」

命令を受けた大柄な騎士が三人、壇上へと上がってくる。騎士たちはフードを被り、顔は見えない。

「い、いったい何をおっ……っ！」

男たちに囲まれると、不安で心臓がトクトクと高鳴る。仰向けでも形の崩れない綺麗な爆乳が、鼓動に合わせてプルップルッと小さく弾む。

開脚姿勢で両の手足を拘束された、裸の魔女を見下ろす騎士たち。

マントに隠されて、周囲からは見えないであろう露出された股間が、クラウゼアに対する肉の欲求でグンッと大きく、硬く身を立たせてもいる。

「ああ……っ！」

騎士たちのペニスは、魔女が唯一教えられたグルークのそれよりも、長くて太くて、しかも強い性臭を放っていた。

複数人の性臭を鼻腔が捕らえてしまうと、また子宮が強い飢餓感で責められてしまう。

「こ、こんなっ……おながは……っ！」

数本のペニスを突きつけられると、まるで毒の剣を向けられたように、恐ろしい。しかも一時的とはいえ魔力を失っている今の肉体を犯されたら、魔力を喪失した果ての

淫女、淫堕魔女へと、また一段と近づけられてしまうだろう。

なのに、一晩中グルーク王子に男性を教えられ続けた女体は、クラウゼアの意志に反して、力強い存在感を再び胎内で教えてもらえると、淫らな期待感に震えていた。

ギー司祭が人々に向かって、淫猥な悪魔払いの宣言をする。

「これより、悪魔信者クラウゼアの身を、我が神テリィボルの奇跡を以て清めましょう。祝福を受けし神の騎士たちによる、肉体を通した魂の清めであります！」

強く宣誓された瞬間、広場に風が吹いた。

騎士たちのフードが僅かに捲れて、見下ろされる魔女から騎士たちの顔が見える。

その途端、クラウゼアは本能的な恐怖と汚辱感で絶句した。

「なはっ——っ!？」

大柄な騎士たちの正体は、なんと敵性怪異の魔法生物、豚人間。

万が一にも下衆な言葉が発せないように、鼻から口にかけて留め具で固定されている。

著しく知性が低く、しかし体力と本能にだけは優れた、使役用の怪物だ。

しかも戦場で消費しても構わないよう、繁殖力も異様に高い。

「ま、まさかはあゝっ！」

ギー司祭は、人間ではなくこの怪異たちに、女体を陵辱させようとしているのだ。昨夜、王子に吞まされたポーションで妊娠に最適の肉体にされているクラウゼア。

しかもポーシヨンの影響で、一度孕まされてしまったら最後、同じ個体の精子が胎内で生き続けて、永久に孕み続ける肉体にされてしまう。

(も、もしこのまま……っ！)

犯されてしまったら最悪、少なくとも人間である王子の子ではなく、豚人間の仔を妊娠させられ続けてしまうかもしれない。

母から受け継いだ魔力も失い、淫堕魔女へと転落し、望まぬ人間か、あるいは怪異の仔を、一生産まされ続ける。

そんな人生、死よりも悲惨な絶望だ。

「いいっ——いやああああああああっ！」

飢餓感で燃える子宮の欲求に押し潰される理性が、恐怖で悲鳴を上げていた。

救いを求めるように、無意識に王子たちへと視線を向ける、クラウゼア。

権力者が並ぶその光景を見た瞬間、魔女は一つの真相にたどり着く。

「どっ、どうかっ——ハっ！」

魔女の悲鳴に、陵辱劇の期待を高めてニヤつく、グルーク王子。

しかし誰も気づかれないだけで、この輪姦劇を誰よりも喜んでいるのが、宰相のガギロギアだった。

豚人間は、隣国ドラケニアの魔法兵士だ。それが密かにはいえ、カライルーズの広場

にいる。

ドラケニアの手引きがあつた事は確實だし、そんな事ができる人物は、一人しかいない。  
「ガ、ガギロギアっ、宰相お……っ！」

宰相と視線があつた瞬間、いつものギラつく邪眼が、一際鋭く邪に輝いた。

今まで考えた事も無かつたし、クラウゼア自身が王子の嫌悪感に気を取られていて、まともに注視しなかつた。

しかし今、ハッキリと理解する。

先代の王ニューフオウから仕える宰相ガギロギアは、間違いなく、ドラケニアの人間だ。このカライルーズは先代王の時代から既に、内部からの侵略を受けていたのだ。

そう理解すると、この審問の全てが繋がる。

ガギロギアに育てられたに均しいグルーク王子。

王子の代になってから派手で豊かになったテリィボル神教。

町で起こつた魔女によるレイプ事件。

今塗られたこの精液は、魔女が搾り取つた、レイプ事件の被害者たちの性粘液だろう。

そして、ドラケニアの侵略からカライルーズを守護してきた魔女、クラウゼアに対する淫堕な奸計。

全ては、ドラケニアの使者である宰相ガギロギアが手引きする、カライルーズ侵略の一

端だった。

魔女の視線から、そんな意志を感じたのだろう。

ガギロギアはクラウゼアに向かってハッキリと、勝利の笑みを浮かべた。

「ギヒヒヒヒッ！」

やはりっ——。

真相に突き当たり、クラウゼアは絶叫をする。

と同時に、ドラケニアに籠絡されたギー司祭が、恥辱の命令を下した。

「では悪魔信者の魔女を清めよ」

「ガッ、ガギロギア宰相とおおっ——いやああああああっ！」

醜い豚顔を淫邪に歪ませた豚人間が、裸身で拘束される魔女の肢体に手を伸ばしてくる。

革手袋で手甲側だけを隠された豚人間の平手で、しなやかな女体が直に触れられ、撫でられ愛撫。

上向きで丸く揺れている乳房が、左右揃って大きな掌で揉み掴まれる。

——ざわり、もみゆる……。

「ひいひいっ——さっ、触らなひいひいっ——でええええっ！」

さんざん、少年たちに撫で遊ばれて過敏にされた肌だ。

怪異の熱い手で、白くて丸い爆乳を揉み上げられて絞られた途端、心臓から子宮までが

強い性感でジリつと灼き上げられてしまった。

「いやはっ——はなしてへっ、くださひいいいっ——ひはっ、あはあああああっ！」

X字で拘束された女体が、劣悪な豚人間に蹂躪される。少年たちの愛撫と精液責めで子宮が飢餓感に燃やされ、秘処は既に恥蜜を湛えて潤っていた。

「ブヒ……ムグムグ」

女性器の匂いを嗅ぎ取った豚人間は、言葉を発せ無いまま、淫らな歓喜の声を上げている。

怪異が人を犯す、恐ろしい陵辱劇。

なのに広場の人々から見れば、国に仇成す悪魔信者の魔女が、神の騎士たちに身を清められる儀式にしか、映っていない。

股間に位置して秘処の蜜香を堪能した怪異の、より硬化した生殖器が、クラウゼアの女孔に押し当てられる。

豚人間に犯される——。

その汚辱が現実化する恐怖に、魔女は本能での嫌悪を口にしてしまった。

「豚ああっ——豚はイヤはっ——豚あっ！」

クラウゼアの言葉に、人々の不信感は怒りへと転換される。

「か、神の騎士たちを、豚って……っ！」

「なんて魔女だ！ この悪魔信者めっ！」

「人間を、選りに選って豚呼ばわりかよおっ！」

「ちっ違ひっ——豚いやああああああっ！」

——っづちゅっ！

誤解を否定しようとしたタイミングで、クラウゼアは豚人間に、子宮の入り口を突かれる程の深くまで、肉詰め強姦をされてしまった。

人間以上の肉厚で胎内から占領をされて、内臓が圧迫されて吐息が詰まる。

「っ——っ豚がはっ——ブタが入ってへええっ——やめてへっ——おくっ、くはああああああっ！」

なのに犯された女体は、胎内を肉充足される本能の喜びに、歪んで満たされてしまう。

胎内から下腹部全体へ、上半身から手足の先や脳の中心へと、強すぎる性感と脱力の波が、隅々にまで伝えられてしまう。

「っおなががつ、イッパイいっ——あたまつ、ヘンにひいひいひいひいひいひいっ！」

子宮からの淫らな歓喜と、より強く刺激される飢餓感で、理性と一緒に恐怖の感情が押し潰されて、官能でトロけさせられていった。

怪物のペニスを呑み込まされると、粒立つ膣壁は更に粒を増やして、強姦勃起を抱き締めて愛撫。

新たな蜜を溢れさせて、陵辱者に感謝の締め付けを示してしまう。

「ブグヒィ…っ！」

クラウゼアを犯す豚人間も、昨夜に処女喪失をしたばかりな膣壁のキツい締め付けを堪能。

ヌルヌルの粒膣壁に抱き締められる感触を楽しむと、自らの絶頂にだけ向かって、腰の抽送を開始した。

——ツづちゅづちゅりゅづちゅッ、づゅぷづゅプづぷりゅつプっ！

怪異の抽送は、あくまで本能の赴くまま。

自らの射精と確実な妊娠に向かつて、ただ強く深く、腰を打ち続ける。

「っひいっ——っおくがズンズンっ——ブタにズンズンされてへっ——あたまがはっ、あたまズンズンんんっ！」

逃れられない裸腰を、更にガッシリと抱かれながら、豚人間の長大な勃起で深く強く、強姦抽送をされ続ける。

太い生殖器を引き抜かれると、自我が消失してしまいそうな程の空疎感で、脳と子宮が灼かれてしまう。

子宮口を突かれる程の根元まで肉詰めをされると、全身の細胞が女の充足感で染められて、もっと下さいと勃起を締め付ける。

腰に打たれる牡豚の力を、丸いヒップがタプタプとくねり、受け止め続ける。

細いお腹も乱れた吐息で上下して、官能の汗艶をキラキラと輝いて魅せていた。

犯される肢体に合わせて前後に揺れる爆乳は、大きな楕円を左右揃って描きながら、先端の媚突をより硬化させて淫美に艶めく。

「ブフヒッ、ブヒヒイイイッ！」

クラウゼアの女体を楽しむ豚人間も、微細に粒立ち締め付ける膣壁の感触が堪らない様子だ。

邪な細い目を淫らに歪め、喜びで締まらない口元からは、唾液が糸を引いて伸びていた。

「しきゆうがはああっ——ヒキュフが燃へてっ——ブタにおかされてへっ——あああああああっ——トケますふううううううううううっ！」

怪異による陵辱と妊娠の危機。

なのに性感に灼かれるクラウゼアの脳神経は、満たされる女体の本能に支配されて、自ら豚レイプに歓喜の艶声を上げてしまう。

女体の性感で、自尊心の柱が根元から、メキメキと倒壊させられてゆく。

そんな魔女の恥態に、人々は更に怒りと劣情を燃やす。

「あの魔女めっ、人間を豚呼ばわりして、しかも浄化されて喜んでやがる！」

「悪魔めっ！」

「ちくしょう！ オレも犯しっ——いや浄化してやりてえよっ！」

人々の罵りが、押し潰されてゆく理性にだけ、惨めに届く。

「みひっ——みなさはああっ——わたくひっ——ああくまとっ、なんてへええっ——んぶううっ！」

潰されてゆく理性で必死の反論をしようとしたら、開かれた唇に、別の豚人間の勃起が侵入。

喉にまで一気に姦入をされると、こちらでも射精に向けての抽送が開始された。

——っづぷゅずちゅぬりゅプっ、ヂゅプぢゅぶグちユるゆちユっヂゅルちユヅぷルゅっ！

「んんんんんんっ——んぶううううううううううううっ！」

太くて重たくて臭い豚人間の勃起で、口内が占領をされる。上あごの裏をゴリゴリと擦られて、開ききった肉カリ部分で濡れた舌を擦られる。

嘔吐感さえ湧き起こる肉の触感なのに、女体は自ら拙い唇奉仕を捧げて、本能的な吸着愛撫。

すえた性臭で口内が満たされると、頭の中から魂にまで、牡ブタの匂いを刻み込まれてゆく。

精液に歓喜する肉体は、亀頭の先端から溢れる苦い豚カウパーを味わわされると、また

強い性感と期待感で、子宮の飢餓感を燃やされてしまう。

一人で生きてきたクラウゼアは、男女の性行為には、当たり前前に疎い。

通常のセックスくらいは知識として知っているけど、男性器を口に含むなんて、常識的な愛撫であつても知らない。

こんな事、されて――。

しかし女体は男性器の肉感と肉姦を素直に歓喜して、自ら吸い付いて感謝の愛撫。

「んぶゆううつ――あばはっ――ブタベニスいやはっ――あぶんっ――ブヒヤっ、おいひいっ――けどイヒヤはっ！」

嘔吐しても不思議ではない初めての行為に、女体は、勃起を含みながら、素直な感謝と歓喜を口にしていた。

口内を犯される肉の圧力と、子宮を責められる勃起の重さで、官能の肢体が更に鼓動を高めてゆく。

美顔の左右を掴まれて犯される唇から、鋭い性甘電が連続で生まれて、脳が痺れさせられてゆく。

目の前で揺れる、豚人間の毛だらけな醜い睪丸袋さえも、それが性感と精液をくれる肉快感の源なのだと、本能的に歪んで理解。

思考が停滞させられてゆくと、犯される肉体は官能だけに支配されてしまう。

「ブヒヤすてきひいいいっ——あふっんふうううっ——ブヒヤにつ、おかひやれうのっ——ラメひゅぎれふうううううっ！」

もう自分が何を言っているのかさえ、クラウゼアには認識できなかった。

口の中と喉奥までもが、汚臭と肉厚で支配をされると、濡れる舌は自ら舐め奉仕を開始。「んぷちゅっ、ちゅぶるっ——んちゅううっ、んんんっ——レロちゅぷっ！」

強姦豚人間の勃起に対して、舌全体で舐め上げて本体を味わう。

亀頭部分の割れ目が触れると、新たなカウパーで苦味を感じて、しかし脳神経はトロけるような、純粹な性感を感じてしまう。

抽送に合わせて高く開いた肉カリ部分をソリつと舐めてしまうと、複雑な形を脳内にハッキリと刻み込まれてゆく。

子宮の入り口を連打され続ける腰は、陵辱者が求めるままに、完全に脱力。

拒絶どころか、自ら女体をレイプの怪異に捧げるように、押さえられるまま、抵抗の微動作すらしない。

上下それぞれの牡豚肉抽送で、しなやかな肢体が前後に揺れる。

丸い巨尻は震えながら勃起突きを受け止めて揺れて、上向きで形を崩さない爆乳は別な豚人間に揉み遊ばれながら、汗を浮かせて肉体の性感を伝えていた。

女体も脳も、牡肉厚の悦楽に染め堕とされて、どうしようも無く服従へと馴けられてゆ

く。

手足の先、全身の隅々にまで、強すぎる性感とそれ以上の飢餓感が伝搬されてゆく。

もうすぐ、またあの性感が戴ける――。

昨夜、グルーク王子に犯されて教えられた性交での絶頂が、また貰える。

女体がそう理解をしてしまうと、もう無意識は性の暴行魔に対する嫌悪など、簡単に消失。

むしろ犯して戴ける喜びに、拙い締め付けと吸い付きで、健気に感謝を捧げていた。

早く絶頂が欲しい――。

女体の本能がそう求めると、無意識に口内が、そして膈壁が、強姦豚人間の肉棒を拙くもより強くキツく、吸い締めた。

「ブヒュヒュヒュッ！」

「ンブギイイッ！」

前後を犯す怪異の勃起が、女体の締め付けに対して、肉の質量を増して反応。

熱と太さと硬さを増した豚のペニスが、射精に向かって更に力を強めた。

――ツツちユプちユフルゆづプヂゆるプつ、づププぶづプゆるちユづプづプツツ！

子宮口と喉への突き込みが容赦無くなると、女体は一方向的な絶頂へと、力強く突き上げられてゆく。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

**二次元  
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

**二次元  
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

**リアルドリーム文庫**

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

**あとみっく文庫**

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



電子書籍も配信中!

**ドリームガーデン**  
2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



大人気PCゲームのコミック多数連載!



コミック  
**UNREAL**  
アダルト

**ヒロイン  
ピンチDX**

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。